

## 報告

## 2019 年度中国四国支部大会報告

中国四国支部長 大膳 司 A、大会実行委員長 岩下康子 B



2019年10月27日(日)に広島文教大学にて、「成長を促す海外留学のスキーム」を大会テーマとして、グローバル人材育成教育学会第5回中国四国支部大会が開催された。2人の基調講演と7組の発表が行われ、参加者は、学生含めて20名と、中国四国支部大会でこれまでの最大規模となった。

13:30からの開始式は大膳司(広島大学)の司会のもと、大会実行委員長の岩下康子(広島文教大学)の挨拶から始まった。その後、引き続きCraig Anthony Nevitt(広島文教大学)による「Rites of Passage for Global Citizens」と題する40分間の基調講演が行われた。現代の外国留学は、グローバル市民への通過儀礼ではないか、とのお話であった。続いて、岩下康子による「持続的成長実現に向けたアジアの課題」と題する25分間の基調講演が行われた。現在の日本を取り巻く世界の情勢について俯瞰した後、アジアにおける留学動向に大きな変化が起こっていることを指摘した。日本の留学地としてのプレゼンスは低下しているだけでなく、留学送り出しにおいても学生の短期傾向が強まっていて、真の意味でのグローバル人材が育っていないことや、多様な留学の可能性を模索する先進諸国と比較して、語学留学という日本独自の留学形態

を継続している現状に警鐘を鳴らしている。

続いて、以下の7組の発表があった。

大膳司は「海外留学の効果—語学能力への効果を中心として—」のテーマで発表した。地方国立A大学の学部学生から収集されたTOEIC IPテストのデータを用いて、その大学で実施されている短期留学プログラムへの参加の有無が学生の語学力とどのように関係しているかが検討された。

その結果、短期留学プログラムを経験しているほど、①最後に受けたTOEIC IPテストの得点は高くなっていると同時に、②入学直後に受けたTOEIC IPテストの得点と比べて有意に得点を上昇させていた。A大学の短期留学プログラムは、事前のTOEIC IPテストの得点も参考にして参加者を選抜しているとともに、プログラム完了後に、必ずTOEIC IPテストを受けることを求めていることが、英語学習への関心継続を促したと考えられる。

続いて、村上理映(東京工業大学)を代表とするグループは、「相互短期派遣を伴う異文化PBLによる学生の意識変化」とのテーマで発表した。東京工業大学では、異文化PBLを通じて世界に貢献する理工系人材を育成するために、2015年度より、チュラロンコン大学工学部コンピューター工学科と共同で、Global Awareness for Technology Implementation; GATI(グローバル理工人概論)という科目を開設し、共通テ

A: 広島大学高等教育研究開発センター

B: 広島文教大学人間科学部

マの下で、双方の学生混合グループが相互派遣と議論を通じて何らかの提案を行う異文化 PBL を過去 4 度行ってきた。本報告は、過去 3 回分の GATI 参加者の意識が、派遣の参加前後でどう変化したのか、を検証した。

その結果、国際意識、異文化理解、プロジェクトに不可欠な能力、プロジェクト実行力など 4 つの分野について両大学の学生についてプラスの効果が確認された。GATI は双方学生にとって有意義なプログラムであり、とくにこれまで社会課題や先進国以外との接点が少ない本校学生がグローバルな視野をもつ第一歩となったことが確認された。

高城宏行(玉川大学)は、「留学の動機付けおよび意思決定を促す留学入門科目とは」のテーマで発表した。日本人学生海外派遣促進を目的に、留学の動機付けや留学に向けた準備を行う授業科目(単位付与)が私立大学を中心に近年設置されており、本発表では、日本人学生の留学を促進する授業科目の設計について複数の事例が報告された。

留学事前科目 1 科目 15 回の授業で扱える内容には限界があり、これまでの研究では、留学事前科目の初回と最終回に受講生に対して実施したアンケートからみると、留学への期待または留学に向けた具体的な行動を問う質問結果に大きな量的変化は見られていない。より意識の変化をもたらすには、各授業において個人の留学目的や準備性に配慮しながら受講生同士の学びや振り返りを促進し、留学の不安や期待を共有し互いにアドバイスや刺激を与えることで留学の動機と目的意識を高め合えるような授業の工夫が重要となると思われる。また、本科目の受講だけでなく、留学関連イベントへの主体的な参加および外国語学習や国際共修を行う専門科目の履修に繋げ、留学の準備性を最大限に高められるよう関係部署と協力しながら継続的に学生を指導していくことが必要であると提案された。

八木智裕(一般社団法人 Global8)は、「賛助会員として海外留学の効果を考察する」のテーマで発表した。グローバル人材の構成要素には色々な定義があるが、ここでは、文部科学省の示した要素 I (語学力・コミュニケーション能力) についての効果を中心に報告された。

これまでの研究結果として、①海外留学効果は学内授業等に比べ顕著である、②外国語学部等以外の学生

にとっての短期海外留学は効果が認められるものの、定着は困難である、③評価を含めた留学プログラムの継続は、ノウハウの伝承等計画者のみならず参加者にとっても効果蓄積が伺える、④留学先は要素 I に限ると近隣諸国の方が効果的である、⑤外国語学部等の語学留学は要素 I に関して目的が明確なこともあり他の学部学生より効果が顕著である、⑥外国語学部等の語学留学は短期～中期が一般的には効果が顕著に見受けられる、⑦外国語学部等の語学留学の長期留学は要素 I のみを目的とするなら対応のレベルに達成可能で、それ以外の学習者においては専門領域や文化的要素を盛り込んだ留学を設計すべきと考えられる、⑧外国語学部等における短期語学留学は初級レベル者には効果的であるが、中級者にとっては要素 I のみでは効果が疑わしくなる。

隅田学(愛媛大学教育学部)を代表とするグループは、「フィリピン大学との連携による高大連携型のグローバル人材育成」のテーマで発表をした。2016 年度より、愛媛大学で行ってきた海外教育実習プログラムを、授業観察中心のステップコースと授業実践中心のアドバンスコースに分けて拡充・系統化するモデルを開発し実践してきた。その際、高大連携の新しい試みの一つとして、前者のステップコースについてはスーパーグローバルハイスクール指定を受けている愛媛大学附属高校の生徒との合同研修を含めた。今回は、その大学生と高校生によるその合同研修部分の効果について報告があった。

大学生と高校生共に、全ての共通項目について、渡航前後で自己評価が上昇した。特に、「フィリピンの文化や習慣を日本の子どもたちに説明できる」「世界の様々な人々と交流することができる」の 2 項目については、共通して大きな上昇が見られた。他方で、大学生と高校生それぞれに特徴的な上昇項目も見られた。「英語で説明をしたり会話をしたりすることができる」「世界の様々な国で自分を役立てることができる」については大学生の方が、「日本を世界的な視野に位置付けて考えることができる」については高校生の方が、上昇度が高いようであった。これらの結果は、大学生が現地参加したサービ斯拉ーニング、高校生が行った日本紹介のプレゼンテーションが影響していると考えられる。

桑原 伶奈(広島文教大学 3 年)は、わかりやすい

英語を使って、「大学時代にアジアを知ることの意味」のテーマで発表した。彼女は、この3年間、主にアジアに主眼を置いて、海外経験を積んできた。その関心は3つある。第1は格安で効果的な英語留学できること、第2は格差問題を考えるため、第3は少数民族について考えたいと思ったことである。それらの関心を満たす対象として、フィリピン、カンボジアの孤児院の子供たち、ミャンマーのロヒンギャ、などであった。アジアのダイバーシティを学び、そして、これからのアジアを考えるいい機会ととらえ、学びを深めてきたいと考えていると結んだ。同大学の1, 2年生による

「ベトナムインターンシップを経験して」の発表では、5名の学生が共同で、夏に実施したベトナムハノイでの日本語教員研修やIT企業研修について、大きな成果があったことを発表した。

最後に、勝又美智雄(グローバル人材育成教育学会会長)から挨拶をいただいた。グローバル人材とは、英語を道具として使って、多様な世界で活躍できる人材であることを改めて指摘いただいた。

大会終了後の情報交換会には15名が参加し、活発な意見交換、情報交換が行われた。

受付日 2019年9月26日、受理日 2020年3月14日